

当の子だったら親はナミのことを怒る」と言われていました(笑)。

人にはそれぞれ 生きているスピードがある

竹中 十五歳の時にアルバイト先で出逢った人とは即同棲して、高校は除籍。十六歳で結婚して主婦になったんやけど、その後の大きな転機となったのは第二子の出産でした。二十四歳で授かった長女の麻紀が心身に重度の障がいを持って生まれてきたんですね。

高橋 娘さんが障がいを……。

竹中 それで、麻紀を連れて実家に帰ると、「ナミが生きているだけでいいんや」と言っていた子煩悩の父が、「わしがこの孫と一緒に死んでやる！」と叫んだんです。この子を育てれば、ナミが苦勞して不幸になるからと言うんです。

これは自分が弱音を吐けば本当に父は麻紀と一緒に死んでしまうかもしれない。何かいい方法はないかなと考えるうちに、ぱっと閃いたのが、「どうすれば麻紀と楽しく過ごせるか。何事も楽しいほうを選んで生きていこう」ということでした。父にも「辛不幸は自分が決める。父ちゃん、死んだらあか

ん」みたいな話をしました。まあ結局、父は最期まで私の最高の応援団でいてくれましたけどね。

高橋 何事も心の持ち方だと。

竹中 そして麻紀の訓練施設に通う中で、目が見えない、耳が聞こえない、精神に重い障がいがあるなど、あらゆるチャレンジドの方に出逢っていったんですが、もう皆すごいんですよ。想像していたような「可哀そう」とか「気の毒」という感じの人は全然いない。

例えば、目の見えないご夫婦が赤ちゃんをしっかりと育てているんです。自宅を訪ねると「赤ちゃんがハイハイするから」と、ピカピカに掃除してあって、引き出しを開けたら、着るものがびしょっと綺麗に畳んであるんですね。

だから、私はいろんなチャレンジドに出逢って思うようになったんです。世の中の福祉がチャレンジドを何かやってあげなければいけない、「可哀そう」な存在だと見なすところから出発しているのが、そもその間違いなんだな。もつとチャレンジドができることに目を向けて、どうやってらできるよようになるのか考えていこうと。

高橋 本当にその通りですね。

竹中 それから、私は娘を授かって初めて、人はそれぞれ生きるスピードが違うんやというのを学びましたね。これは私が娘から学んだ最大のことだと思います。

高橋 生きているスピードが違う。
竹中 人間は生まれて何か月で喋るようになり、何歳でこうなって、ということが常識のように言われていますけど、麻紀は上の兄が喋れるようになった年齢になっても喋れないどころか、いまま喋ることはできません。麻紀は麻紀のスピードで生きているんですね。

だから人は皆それぞれ、私も私でいいと開き直ったんです。「人間はこうでなくちゃいけない」という世の中にある枠から、ある意味すごく不遜なんやけど、麻紀のおかげで解放されました。

あと、人が支えられる、支えるという関係は、グラデーションのようなものだということも教えられました。世の中には支えつばなしの人はいないし、逆に支えられつばなしの人もいないんです。

高橋 その後は、どのように歩ん

でいかれたんですか。

竹中 麻紀が生まれ、しばらく身体障がい者施設での介護、手話通訳といったボランティア活動に携わっていました。その中で、当時珍しかったITを活用し、いろんな人と関わりをもつて生き生きと働いているチャレンジドの方にも出逢ったんですね。

その一人がSくん、彼は高校時代にラグビーの試合中の怪我がもとで全身が麻痺してしまっただけど、電動車椅子で大学院に通い、コンピュータをバリバリ勉強して、家業のマンション経営を助ける管理ソフトを自分で組んだり、もうすごい子だったんですね。ご両親も「うちの息子、すごいでしょう」とニコニコしていて、私は「ああ、チャレンジドが働けるようになるってことは、こんなにも皆が変わることなんや」っていうことを非常に実感しました。

高橋 素晴らしいですね。
竹中 それで、Sくんと同じようなことができる人がもつというはずだと、「君のように働けるチャレンジドが増えれば、これまでとは違う福祉、その人に残された可能性を全部引き出す、その人がその